

2010年3月30日

国際常民文化研究機構・神野班

## 箱根合宿報告

### ■日程

第一日目／3月25日（木）

於：箱根湯本 ホテル明日香会議室 13：00～21：00（食事休憩含）

第二日目／3月26日（金）

於：神奈川大学 日本常民文化研究所 10：30～16：00（食事休憩含）

### ■出席者（敬称略）9名

- ・神野善治（武蔵野美術大学）
- ・河野通明（神奈川大学）
- ・佐々木長生（福島県立博物館）
- ・八重樫純樹（静岡大学）
- ・石野律子（武蔵野美術大学）
- ・新国勇（福島県南会津郡只見町）
- ・高橋典子（川崎市市民ミュージアム）
- ・長井亜弓（国際常民文化研究機構）
- ・馬渡なほ（国際常民文化研究機構）



### ■会議内容（概略）

[第一日目]

#### ・「平成21年度の活動について」（神野）

今回のプロジェクトでは、さまざまな攻め方で民具の名称に迫っていかれたらと考えている。そのとりかかりとして、今回は既に方言として拾い上げられたものの整理（民具の名称のみを拾い出して整理する）から始めることにした。

#### ・「調査対象民具の抽出について」（馬渡）資料①、②

そこで神野班ワーキンググループ（以下 WG）では、『全国方言辞典』（東京堂出版）より、民具の名称のみをピックアップし、項目数の多いものから順にランキング抽出を行った（2月に郵送配布済）。なお、本データは23個の「大項目」と、「道具名」、「名称」からソート（分類・整列表示）ができるようになっている。

ただし、ここで行った分類は『全国方言辞典』から抽出した語彙を整理することを主眼とした便宜上のものであり、抽出したものに関しても、階層が混在している、部分名などが入っているなど、整理はごく粗い。今後、他の調査資料を重ねていくために

は、分類や定義をしっかりとさせる必要がある。→**今後の課題**

なお、今回抽出した語彙のうち興味深い結果の得られた「燐寸」については、簡単なマッピングも行ってみた。サンプル数が十分ではなく、国語研究所が行った方言調査までの精度はどうも望めないが、ある程度の傾向を知ることはできた(資料①参照)。こういった地図も今後成果として残していけたらと考えている。→**今後の課題**

・「民具抽出の基準および確認事項」(長井) 資料③ 1～2 p

民具の数は膨大で、すべてを本プロジェクトの調査期間内に整理することはできない。そのため、ある程度調査項目を絞る必要がある。そこで、調査民具の抽出基準について、ここで確認しておきたい(資料③参照)。

意見 A→「標準名を選定」するための資料を集めると同時に、「地方名をきちんと整理しておく」ことも大事な作業である。すでに地方名(古い名称)が消えている地域も多く、地方名を裏付けるバックデータまで、100%は無理だとしても少しでも整理できればと思う。

意見 B→実態のわかるもの(バックデータのあるもの)をしっかりと拾っていくことが大切。「〇〇するもの」「〇〇という形状をしたもの」など、定義付けをしたうえでデータを重ねていきたい。

意見 C→名称に関しては、商品名が広まったものだったり、発明者の名前だったり、伝播先だったりするケースがある。そのものの誕生と歴史といった裏付け調査も必要。

意見 D→工業製品の民具と手作り民具とあるが、それについては、まずはこだわらずに収集する。

意見 E→今後の民具分類については、『民俗資料調査収集の手びき』(文化庁)または『絵引き民具の事典』の分け方に準拠する。多くの博物館などで既に広く使用されている分類が望ましい。独自の分類にしてしまうと、データベースとして統一できず、引くときに使いづらい。

意見 F→「水瓶」と「水甕」、「火打ち石」と「燧石」のように表記がさまざまあるものについては、どの表記を採用したかも含めて、この委員会で明らかにしていきたい。基本的には、誰でも読める平易なものが望ましく、ふりがなをつけておくことも必要。(やたら古い名称や難しい漢字を有難がった時代の弊害が残っているため)。

意見 G→同じ名称が違うものを指していた(同音異物)など、作業を進めるうえで生じた疑問や気づきについてはその都度メモを残しておき、最終的に「こういう問題があった」などの部分を集めて「論考」として出してはどうか。

意見 H→「漁具」、「着物」、「灯り」など、専門に研究している方のいる分野は、その方を招いて勉強会を開くなど、積極的に協力を要請していきたい。

・調査対象民具選定の基準について【討論】資料③ 2～6 p

ランキング表をもとに神野班が抽出した項目について検討を行った。

意見 A→実際のモノに当たる作業のひとつの方法として、「日本民俗調査(県別の調査)」が手掛かりになりそうだ。大元のカードは文化庁にあるはず。

意見 B→民具は機能が単一でない場合がある。本当にその用途だけに使われていたのかも、検証してみる必要がある。また、「横槌にハチマキをしておく」と物覚えがよくなる」「箒を逆さに立てておく」と客が早く帰る」など、その民具にまつわる話があれば一緒に収集しておきたい。

意見 C→素材と用途が実にさまざまな民具も多々ある。どれを抽出するか。

意見 D→人の名前がつく民具に焦点を当てても面白そうだ。

意見 E→名称だけを俎上に上げるのではなく、「形つき」で議論していかないと危険だ。

・「民具の標準名設定に向けての提案」(河野) 資料④、⑤

「民具に標準名を設定するというのは、いわば民具名の JIS 規格を設けるようなものである。ただし、すべてを一挙に解決しなければいけないものではない。肩の力を抜いてできるところから、10 項目でも 20 項目でもできるところから、まずは第一段階として整理・提案していけばいいのではないか。中身がしっかりしていれば、その後、二弾、第三弾と整理・提案を進めていくことができるだろう」(その他提案は資料④参照)。

意見 A→方言の整理と並行した動きとして、河野先生のように既存の方言の一つを標準名とするのではなく、機能や形などをもとに、一定のルールに従った名称提言をしていくのも一つの方法である(神野)

意見 B→マッチや包丁など、すでに標準名化して安定しているものについては、地方名の整理をし、標準名としての名称がないものについては、標準名称を設定する作業を行ってほしい(河野)

意見 C→「鋏」という総称では安定していても、その下位階層となる「万能鋏」はさまざまな名称があったりする。そのあたりも整理してほしい。(神野)

[第二日目]

・「民具名の成り立ちについて～只見の民具から」(佐々木長生)

(前回の会議を開催、収蔵庫を紹介した) 只見の民具を 15、6 年かけて整理した中から、民具の名前がどのようなところに起因して生まれているかを分析した。只見や東北地方で見られる民具名の具体的例は以下の通り(抜粋)。最終的には名称の一覧表に写真、図を入れた状態で紹介したい。(機構の論文集に寄せた原稿のメモより)

○ 形態的なもの：縦臼、横臼。千歯、三本鋏など。

- 材質的なもの：石、木、土、など。
- 機能的なもの：使用方法や機能から。糲摺り臼、茶臼。
- 制作的な面から：羽を合わせるから合羽。曲げ物だから曲げわっぱ。
- 伝搬、製作地：唐箕、唐臼。京都でつくられた京升、京篩。テンノウジ（鋸）
- 社会性：千歯扱きをゴケダオシと呼ぶ。
- 身体部位：腰籠、足半、手指、手甲。背中当て、腹巻き、胴巻き、など多数。
- 動作が入るもの：背負うから背負い梯子。手提げ籠、押し車など。
- 動植物：ツルハシ（鶴嘴）、トビクチ（鷹口）、クモッケツ（只見の作業着）
- 民具の形態から他の民具の名称がうまれた例：ホッキマンガ。ほっき貝を採る道具の形がマグワに似ているところから。
- 擬音からの名称：ブリンブリン、ザランザラン
- 作業能率から：千石ドオシ、万石ドオシ。
- 人名から：ゲンベイ、ジンベイ、ゴンベイ。 など。

意見 A→民具をどの時点でどう捉えるか、民具が機能化、細分化していった視点も加えたらいいのではないか。（八重樫）

意見 B→今回のプロジェクトの基本的な問題を整理して頂いたが、部分的には大雑把。例えば動作のことも、道具は人間の体の延長なので、動詞はかなりあるのでは。それを全部書き上げてみたらどうか。まずは会津の発想を丁寧に行っていくことから始めることをおすすめする（神野）

#### ・『全国方言辞典』と『標準語引き 日本方言辞典』との比較（石野律子）

WG が作成した大項目別ランキング表に挙げられた項目すべてについて、『標準語引き 日本方言辞典』と丹念に突き合わせ、検討を行った。『標準語引き・・・』のほうが出版年が新しく、古い名称が削除されているためか、全く方言が抽出されていないものもあったが、かえって方言数の多い項目もあった。下敷きになっている資料の数も膨大で、かなり有効と思えるので、これも基礎資料として重ねておいてはどうか。

意見 A→早速、本を購入し、『全国方言辞典』『習俗語彙シリーズ』とともに重ねて、基礎資料としたい（神野）→今後の課題

意見 B→今回箱根合宿のために神野班が抽出した項目と、突き合わせながら面白そうだなと思ったものがかなりかぶっている。とりあえず、今回抽出したものを中心に、この先作業を進めてもよいように思う（石野）

#### ・「灯火具の分類と名称」（高橋典子）資料⑥、⑦（分類表および写真資料）

川崎市市民ミュージアムの企画展「灯りの情景展～灯りと人の物語」を実施するにあたり、さまざまな博物館で実施された図録を集めるところから始めてみた。すると、統一された分類や名称がないことがわかり、独自にルール作りをする必要に迫られた。

そこで、まず写真入りリストを作って全国各地に配布し、意見を求めたところ山ほどの批評・批判が寄せられた。灯火はコレクターの間で通用している名称があるという面でも難しい分野である。集まった指摘をひとつずつ検証し、疑問を解決していくなかで、「何を燃やしているか」を軸に分類できるのではと思い当った。そこで、企画展に際しては、燃料や形状に着目した分類を名称化し、地方名は避けた。コレクターの世界で通用している名称も同様である。

意見 A→燃料に着目されたのは炯眼だった。ぜひ今回の発表をまとめて名称提案してほしい（河野）

・「民具名称のデータベースの構築に向けて～民謡データベースの構築に向けて」（八重樫純樹）資料⑧、⑨、⑩

収集者（聞き取り者）によって変わってしまう細かい発音などの違いを、コンピュータは認識することはできない。人間ならば共通のものとして認識できる微妙な差異を、コンピュータは別物として取り扱ってしまうため、データを取り出すためには共通の俎上に載せるための標準名は必須課題である。また、研究の本質に迫るためには現地調査や実物に当たることが不可欠であることを考えると、データベース自体は索引として機能すればいいと考えている。その点では専門知識が豊富な研究者が情報入力するよりも、ある程度の素養があり、簡単なレクチャーを受ければ記載できる程度の情報カードを作成したほうが、応用範囲の広い単純明快なデータベースになるように思われる。など、データベースを構築するうえで重要となる課題について、これまでの研究成果をもとにお話いただいた。

【次回研究会について】

次回は7月3日（土）～4日（日） 国際常民研究機構 於 27号館 2-201  
ゲスト候補として みやもとやえこさん（着物）などを検討中。

以上